博士論文（要約）

西ドイツにおける 68 年運動の余波

－若者のローカルな運動の実践に注目して－

川﨑 聡史

博士論文（要約）

本論文では、68 年運動に影響を受けた若者が、私生活に近い領域でどのような活動を行ったのかについて検討した。68 年運動とは、1960 年代後半に世界各国で若者を中心にして盛り上がった社会全体に対する異議申し立て運動である。本稿においては、とりわけキンダーラーデン（Kinderladen）とドイツ社会民主党（SPD）の青年組織ユーゾー（Jusos/Jungsozialisten）が行ったローカルな活動に注目した。

本稿の検討対象時期は 1967～77 年である。1967 年は、68 年運動の盛り上がりが最高潮に突入した年である。1977 年は、68 年運動に影響を受けた若者の活動が大きな変化を迎えた年である。この年までに、ほとんどのキンダーラーデンは社会主義的な幼児保育施設ではなくなり、ユーゾーは急進社会主義的な組織ではないことが明らかになった。本稿では、1967～77 年の時期を 3 つに分割した。第 1 期は、1967～68 年の 68 年運動の最盛期であり、第 1 章で扱った。第 2 期は、1967～70 年である。この時期の活動家は、運動の新しい方向性を模索していた。第 3 期は 1969～77 年であり、新たな運動による実践期である。

本論文での議論の出発点は、68 年運動に関する相反する評価にある。社会の様々な勢力と制度に抗議を行った 68 年運動は、西ドイツ社会のリベラル化、つまり多元化と自由化を促す重要な刺激になったと評価されている。しかし、68 年運動とその後の運動は、しばしば急進的な社会主義思想を掲げて攻撃的な活動を行うことがあり、リベラルさからは程遠いこともあった。本稿では、この 2 つの矛盾する展開の関係を明らかにすることを目指して、次のような問いに取り組んだ。社会主義を信奉する若い活動家は、いかなる目的を掲げて活動し、ローカルな現場ではどのように運動したのだろうか。若者の運動は、西ドイツ社会との間でどのような相互作用を持っていたのだろうか。若者の運動において、社会主義思想が果たした役割とは何だったのだろうか。さらに西ドイツ社会全体のリベラル化、つまり多元化と自由化に、運動はどのように貢献したのだろうか。

これらの問いに取り組むにあたり、本稿はドイツの文書館で収集した史料を用いた。キンダーラーデンに関する史料は、主にベルリン自由大学付属の議会外反対派文書館とフライブルクの社団法人バーデン・社会運動文書館で収集した。ユーゾーに関する史料は、主にボンのフリードリヒ・エーベルト財団附属の社会民主主義文書館にて調査した。さらにキンダーラーデンとユーゾーのローカルな活動については、文書館史料が不十分であることもあったため、活動家が自ら出版した文献と地元メディアによる報道も適宜参照した。

第 1 章「『1968 年』の展開とその帰結」では、68 年運動に至るまでの西ドイツの展開について扱った。1949 年に建国された西ドイツでは、1966 年にキージンガー大連立政権が成立するまで保守的な風潮が支配的だった。しかし、50 年代からの経済成長と国民の生活

水準の向上によって、西ドイツ社会は次第に変化した。中でも 2 つの理由で西ドイツは、よりダイナミックな社会になっていった。まず、民主的な意識を持って自発的に活動する市民が登場した。政治的な意識を持つ市民の影響力は、1962 年のシュピーゲル事件で明らかになり、社会運動の有効性が再発見された。さらに、社会は人の力で改良できるという考えが普及した。計画と介入によって社会を改善できるという意識は、積極的に政治に関与しようとする市民の意欲を刺激した。

西ドイツ市民の生活条件が変化したことで、運動は新しい性質を獲得した。68 年運動では教育改革、大連立政権、緊急事態法制、ベトナム戦争、既存のメディア・コンツェルンへの批判が激しい争点になったが、これらは市民の生存条件に直接関わらなかった。観念的な政治問題でも市民を大規模な抗議運動へと動員することができるようになった。

68 年運動の展開を考えるにあたり、西ドイツの学生運動を牽引した社会主義ドイツ学生同盟（SDS）に注目することが重要である。SDS は、キンダーラーデンとユーゾーに強い影響を与え、2 つの運動の出発点になった。SDS は SPD の学生組織として 1946 年に設立されたが、1959 年以降、新左翼勢力の浸透が目立つようになった。その後の SDS は、SPD の国民政党路線を強く批判したため、党幹部会との関係が悪化した。SDS の左傾化に反発した右派メンバーは、社会民主主義学生同盟（SHB）を設立し、1961 年に SPD は、SHB を公式の学生組織として承認した。その後の SDS には特にルディ・ドゥチュケのような反権威主義者が参加して大きな注目を集めた。しかしながら、SDS の学生運動は急進化することで西ドイツ社会において次第に孤立するようになった。SDS を批判した若者は、キンダーラーデンやユーゾーといった別の運動形態を模索していた。

ユーゾーは 35 歳以下の SPD 党員が参加する組織だが、60 年代後半以降、党に反抗姿勢を示し始めた。中でもユーゾーの学生メンバーが参加する SHB において、若い世代は SDS と対決するよりも協力することで、その影響力を利用することを目指した。SHB は、SDS の主張を穏健な形で受け入れることで、多くの大学の自治会で成功を収めた。他方、ユーゾーは 1968 年から特にヘッセン州南部支部の活発な働きかけによって、次第に左傾化した。ユーゾーの反抗に対して、党幹部会はすぐに厳しい態度を取ることはなかった。この理由は、反抗的なユーゾーと SHB が若者の人気を集めることで、若い党員が 1969 年の連邦議会選挙で SPD の勝利に貢献することを党幹部会は期待していたからだった。

第 2 章「運動の方向転換」では、1967～70 年にかけて新しい運動を生み出した 5 つの事象について扱った。

第一に、反権威主義教育と呼ばれる新しい教育が登場した。1967～68 年に生活共同体コミューン II が新しい教育活動を開始した。コミューン II は、キンダーラーデンが後に行う教育を先駆的に実践していたものの、そのコンセプト自体は全ての参加者に支持されていたわけではなかった。1968～69 年に一部の参加者が離脱することで、非暴力的なキンダーラーデン運動が成立した。

第二に、暴力は政治的手段として正当か否かについて活発に議論された。キンダーラーデン活動家の中には、政治的暴力を支持する者がいた。そうした人々は 68 年運動が戦闘性を増すと、政治的暴力に賛同してキンダーラーデンから離脱した。SPD の若い党員は、

暴力行使の正当性を認めなかった。ユーゾーと SHB にとって、暴力問題は SDS の学生運動から最終的に離脱するきっかけだった。

第三に、労働者の政治的能力が見直されたことは重要である。1969 年 9 月に鉄鋼・鉱業労働者が山猫ストライキを行ったことで、若い活動家は西ドイツの労働者が「革命のための潜在能力」を未だに持っていると考えるようになった。この出来事をきっかけにキンダーラーデンとユーゾーの活動家は、古典的な社会主義思想に立ち返るようになった。キンダーラーデン活動家は子どもに社会主義的な教育を施そうとし、ユーゾーは労働者の政治的要求を汲み取りたいと考えるようになった。このことは、70 年代に若者のローカルな活動が活発化する前提になった。

第四に、1969 年 10 月のヴィリ・ブラント政権の成立は、ユーゾーに重要な刺激を与えた。ブラントは、「もっと多くの民主主義を敢行したい」と呼びかけた。特に若い党員にとって民主主義を拡充することは、社会主義運動を進めることを意味した。ブラントの演説に刺激を受けた若者は、ユーゾーに積極的に開始し、党内反乱を開始した。

第五に、SDS の解散によって 68 年運動は完全に分裂した。それまでの SDS は多様な抗議勢力を結びつける役割を持っていた。SDS が解散した後、活動家はそれぞれ別の道を歩み始め、キンダーラーデンとユーゾーは独自の運動として活動を開始した。

第 3 章「キンダーラーデンの実践」では、1977 年までの西ベルリンにおけるキンダーラーデンの活動を分析した。キンダーラーデンは、1967～68 年にヘルケ・ザンダーらフェミニストによって設立された。当初、「女性解放のための活動評議会」に参加した活動家は、女性の自己実現を促すために、私生活に近い場所で活動することを選び、キンダーラーデンに注力した。しかし、すぐに男性活動家がキンダーラーデンに参入し、フェミニストとの間で紛争状態に入った。男性活動家はフェミニストの運動を吸収し、西ベルリンのキンダーラーデン全ての主導権を握ることを試みて、「社会主義キンダーラーデン中央評議会」を設立した。男性活動家はフェミニストに活発な政治攻勢を仕掛けたものの、彼らの強引な活動は運動の分裂を招いた。その後のキンダーラーデン活動家は、それぞれローカルな施設で運動を行っていた。

60 年代にキンダーラーデンが登場した理由は 2 つある。

まず、幼児の世話をする施設への需要が高まっていたことが挙げられる。この背景に産業構造が変化し、女性の社会進出が進展したことがあった。しかし、保育分野の改革が遅れていたため、西ドイツでは幼稚園が不足していた。キンダーラーデンは、この問題を市民が自発的に解決するための取り組みだった。

次に、特に若者の間に保守的な教育への不満が募っていたためである。キンダーラーデンは、旧来の教育方法に対する代替案だった。活動家は、規律と服従を重視する伝統的な教育はナチズムに至ると批判した。68 年運動の反権威主義に影響を受けた人々は、幼稚園の状況が西ドイツの権威主義的な社会を象徴していると考え、子どもに多くの自由を認める新しい教育運動を開始した。

キンダーラーデン活動家は、子どもの教育に関して次のような目標を掲げた。子どもを規律訓練から解放すること。子どもに自分の生活を自ら決める能力を身につけさせること。

親を含めた他人に依存しない自立した人格に育てること。これらは反権威主義教育の目標だったが、社会主義を信奉する活動家はさらに目標を発展させて、子どもを革新的な社会主義者に育てることを目指していた。そのために活動家は「プロレタリア的教育」を提唱し、1920～30 年代の社会主義者と教育学者による理論を実践する教育を行った。

本稿では、教育と保育を重視した 2 つの施設に注目し、社会主義者によるキンダーラーデンのローカルな実践を検討した。西ベルリンの第 2 シェーネベルク・キンダーラーデンは教育を重視し、そこで活動家は反権威主義教育と「プロレタリア的教育」をできる限り厳密に実践しようとした。西ベルリンにおけるヴェアフト通りのキンダーラーデンは、保育を重視した。このキンダーラーデンは、早い時期から社会主義的な主張を前面に押し出さなくなり、その代わりに地域住民の要求を汲み取ることで協力関係を構築した。ヴェアフト通りの活動家はプレーパークを建設し、子どもの生活の質を高める活動を行った。

当初のキンダーラーデンは、既存の社会と教育を激しく批判したものの、外部の組織と制度に関わる過程で次第に急進性を減じた。多くのキンダーラーデンは、行政とメディアとの関係、および毎日の活動を通じて普通の幼児保育施設に近づいた。キンダーラーデンは、財政問題の解決のために行政との交渉に臨んだ。運営のためにキンダーラーデンは補助金を必要としていたため、行政からの要求に歩み寄る必要があった。メディアはキンダーラーデンを扇動的に報道した。このことに対して活動家は直接行動で抗議したため、両者の関係は非常に悪くなった。他方、ヴェアフト通りのキンダーラーデンは、世論の批判的な雰囲気を感じ取ったため、自らの政治的性格を隠した。しかし、70 年代を通じて反権威主義教育の問題意識は、メディアを通して次第に社会に受け入れられた。これに伴い西ドイツにおいて教育理念の変化が生じ、相対的にキンダーラーデンの急進性が目立たなくなった。さらにキンダーラーデンでの毎日の活動は、次第にルーティン化されて穏健なものになっていった。急進的で自発性に基づく活動は参加する親にとって負担であるとともに、子どもが通常ではない環境で育つことへの不安感が親の間に広まったため、キンダーラーデンの運営形態は少しずつ通常の保育施設と似たものになっていった。

第 4 章「ユーゾーの実践」では、1969～77 年の SPD の青年党員による活動を扱った。1969 年 12 月のミュンヘン全国大会で、ユーゾーは党幹部会に公然と反旗を翻した。青年党員は、それまで党に忠実だったユーゾー幹部会を解任し、SPD の国民政党路線を真っ向から批判して、再び労働者政党に回帰することを求めた。ユーゾーは、党と社会をより社会主義的に改革し、民主化することを求めた。もっともユーゾーによる要求の核心は、社会の草の根により多くの参加機会を保障し、政治的権限を移譲することだった。この会議は、党幹部会から厳しく批判された。

会議は大きな注目を集めたものの、ユーゾーは具体的な活動については曖昧な方針しか示せていなかった。そのため、ユーゾーは 1970～71 年にかけての全国大会で「体制克服的改革」と「二重戦略」という 2 つのコンセプトを提示した。この方針は、党内と党外という 2 つの場所での活動を強化することで、長期的に既成体制を乗り越えて社会主義社会を樹立し、西ドイツを民主化することを目指していた。

党内でユーゾーは、SPD を再び労働者政党に戻すことを試みた。青年党員の基本的な戦

略は、党への忠実さをアピールしつつ、SPD の政策に「反資本主義的性格」が欠けていると批判するという困難なものだった。若い党員は党から自立して批判的に行動しようとしたものの、この振る舞いはユーゾー内部の派閥対立の下地になった。さらに具体的な行動に打って出ようとすれば、ユーゾーはすぐさま党幹部会から厳しい制裁を受けたため、党内改革はほとんど進展しなかった。

その代わりにユーゾーは、党外のローカルな領域で成果を上げることができた。ユーゾーは、急進的な要求を地方に持ち込むことで比較的成功裡に活動できた。1971 年 4 月のマンハイム会議で青年党員は、ローカルな活動方針について年配地方政治家と包括的に議論し、広範な合意を得ることができた。とりわけヘッセン州南部支部ユーゾーが取り組んでいたフランクフルト・アム・マインでの再開発反対運動が、この会議での議論に影響を与えていた。そして会議で決められたことが、フランクフルトでも実践された。

フランクフルトでは、連邦議長カールステン・フォークトによって指導されたユーゾーが、市民運動団体であるヴェストエント活動委員会と協力し、SPD 市政府による再開発政策に反対した。青年党員は、再開発によって住居を失いそうな賃借人を組織し、彼らのために合議機関を設立した。さらにユーゾーは、公益住宅企業に働きかけて住居の管理を委託し、社会的弱者に優先的に貸し出させた。青年党員は、住居を直接占拠して抗議の意を示すことがあったものの、同じ時期にシュポンティと呼ばれる戦闘的な活動家による住宅闘争と歩調を合わせることはなかった。

地方でユーゾーは比較的自由に活動できたものの、党との関係に関して全く問題がないわけではなかった。中でも共産主義組織との関係は、紛争の種になった。当時の SPD は、「新東方外交」を通じて東側諸国との関係正常化を進めていた。同時に SPD は、自らの政治的信頼性を守るために東側諸国の影響下にある組織の存在感を国内で拡大させる意図はないことを示そうとし、共産主義組織との接触に神経質になっていた。他方、ユーゾーにとってローカルな領域で活動する場合、共産主義組織との接触は完全には排除できなかった。党幹部会は、ユーゾーに対して党からの追放も含めた厳しい制裁措置を加えた。ただ党幹部会が問題にしているのは、あくまで共産主義組織との協力であった。そのため、ユーゾーが地方に山積みになっている問題を解決しようとする姿勢自体は、直接の批判対象になることはなかった。

1973 年のオイルショックと 1974 年のブラント政権退陣以降、西ドイツは保守的な「傾向転換」の時期に入った。この時期には改革に好意的な風潮がなくなり、ユーゾーの活動は 3 つの逆風を受けるようになった。

まず、ユーゾー内部で社会主義理論をめぐる派閥対立が激化した。とりわけシュタモカップ派と反修正主義派は、より急進的な社会主義思想を支持して、改革派中心のユーゾー幹部会に激しい批判を行った。

次に、1972 年 1 月の過激派条令を境に、党幹部会は大きく方針を転換した。68 年運動以降、SPD は政治的な若者を党に統合しようとしていたが、今や彼らを排除しようとしていた。過激派条令は、急進左翼の若者が公職に就くことを防ぐものだった。ローカルな領域でユーゾーは積極的に条令に反対したものの、党幹部会に方針撤回を促すことはできな

かった。

第三に、党幹部会はユーゾーに対する制裁を強化した。その最高潮は、1977 年のユーゾー連邦議長クラウス・ウーヴェ・ベネターの追放だった。ヘッセン州南部支部出身のハイデマリー・ヴィーチョレック＝ツォイル率いる改革派幹部会は、シュタモカップ派と反修正主義派による批判にうまく対応できず、派閥対立が激化した。この過程でシュタモカップ派の指導者であるベネターが台頭した。1977 年 4 月のハンブルク全国大会で連邦議長に選出された彼は、党幹部会を挑発する発言を行ったため、すぐさま党籍を剥奪された。この事件は、党幹部会がユーゾーの政治的逸脱をこれ以上許容しないという姿勢の現れだった。

これらの要因によって、ユーゾーによる反抗は最終的に終わりを迎えた。

第 5 章「68 年運動の遺産、およびキンダーラーデンとユーゾーの意義」では、68 年運動の遺産、およびキンダーラーデンとユーゾーの活動の意義について検討した。68 年運動で活動家が掲げた目標はほとんどが実現しなかったものの、運動は長期的には 3 つの遺産を残した。まず、多くの若者が継続的に政治活動に参加するようになった。次に、若者の運動が社会の中で存在感を増した。運動が社会の様々な勢力と関係を結んだことで、若者の政治的影響力が高まった。さらに、若者は長期的な活動を受け入れていた。多くの活動家が大卒者で将来に希望を持っており、いつの日か自らの理想を実現できると信じて運動した。

これらの遺産が若者の運動の前提だった。本稿では、60 年代末以降の若者が持っていた政治的態度を「ポスト革命的理想主義」と名付けた。これを筆者は、社会主義社会の実現を理想として社会の急進的な変革を目指しているものの、近い将来の暴力革命によってではなく、既存の社会制度内での長期的な取り組みによって目標を達成しようと試みる政治的態度として定義した。この態度をとった人々は、政治的な活動の対象を「コミューン化」した。本稿では、この「コミューン」を生活共同体と地方自治体という意味で捉え、「コミューン化」を、政治的問題を私生活に近いローカルな領域に落とし込んで解決しようとする試みとして定義した。「ポスト革命的理想主義」と「コミューン化」は、キンダーラーデンとユーゾーの展開を説明するものである。

「ポスト革命的理想主義」の特徴は次の 4 つである。

第一に、キンダーラーデンとユーゾーは、社会全体に直接変革しようとする試みからある程度距離を置いた。活動家は、言葉上は急進的な目標を主張していたものの、それを実現するための行動を棚上げにした。彼らが真剣に変革を実行しようとしても、対抗する勢力があまりにも強力だった。活動家による変革の試みはそもそも実行されないか、運動内部の意見対立でほとんど進展しなかった。活動家は緻密に理論を組み立てたものの、その思想は当時の社会の状況をうまく言い表せておらず、一般的な西ドイツ人にとって魅力的とは言い難かった。

第二に、キンダーラーデンとユーゾーは、活動の場を「コミューン化」することで限定した。68 年運動以降、本稿で扱った活動家は社会全体を即座に直接変えようとする試みの有効性自体を疑問視するようになった。代わりに彼らは、地域社会の私生活に近い場で活

動するようになり、行動の自由を獲得した。活動家は、ローカルな領域である程度成果を上げることで、自らの政治的主張に説得力を持たせることができた。

第三に、「ポスト革命的理想主義」は、いわゆる「制度内への長征」に含まれる概念である。「制度内への長征」は、68 年運動の活動家が長期的な活動を通じて、ドイツ社会の様々な分野で指導的な立場に到達したことを意味している。この言葉は、活動家が基本的には既存社会を受け入れていたことを想定している。しかし、60～70 年代に「制度内への長征」は、暴力的に社会の転覆を狙っていた人々によっても用いられていた。これに対して本稿では、「ポスト革命的理想主義」を「制度内への長征」を行った若者の中でも、暴力活動をそもそも想定していない者の態度として提示した。

第四に、「ポスト革命的理想主義」は、脱物質主義と参加革命と共通点があるものの、全くの同一ではない。脱物質主義は、物質的福祉を当然視し、むしろ生活の質や新しい経験といったものを重視するような人々の新しい価値観を意味する。参加革命は、より良い生活の質を求める市民が、既存の政党や団体に頼らずに直接的な社会参加を大規模に行うようになったことを指している。「ポスト革命的理想主義」も、生活の質を改善することと参加機会の拡大を求めていた点では共通している。しかし、脱物質主義と参加革命の運動は、もっぱら市民の自己決定に関わるものであり、社会全体に関係する問題に積極的に取り組むことはあまりなかった。他方、「ポスト革命的理想主義」は、社会全体のオルタナティヴな構想を意識的に提示した。この構想は古典的な社会主義思想に沿ったもので、新しい展望を積極的に提示するようなものではなかったものの、社会の変化に戸惑う一部の若者に支持された。古い枠組みで新たな変化に対応しようとする点で「ポスト革命的理想主義」は、既存の政党と政治団体による統合方法と共通点を持っていた。

「コミューン化」は、60～70 年代の社会における領域をめぐる争いの一部だった。キンダーラーデンとユーゾーは、参加者が自己決定できる領域を求めていた。活動家は、この領域を獲得することが社会の民主化であると理解していた。しかし、自己決定の領域を求めることは、当時の連邦政府の政策と矛盾することがあった。首相ブラントは社会の民主化を呼びかけていたものの、政府の野心的な改革政策は民主的ではない要素を持っていた。改革の内容は、選挙の洗礼を受けない専門家によって決定され、政治と経済の指導者の協力によって実行された。この改革政策は、議会制度に基づく権力とは異なる新しい権力の領域を生んだ。さらに改革政策は福祉国家制度を拡張したが、これによって国家は社会のより広い領域に介入する権限を持つようになった。国家権力の拡張は、市民による自己決定権への要求と矛盾した。キンダーラーデンとユーゾーは、国家の権力拡張に対してローカルな領域で活動することで対抗した。

最後に、キンダーラーデンとユーゾーの活動と、西ドイツ社会のリベラル化の関係を社会主義思想が持った意味を手がかりに明らかにする。キンダーラーデンとユーゾーは、自らの思想的な原動力を社会主義思想に求め続けていた。その思想はしばしば独善的で、価値観が多様化した社会において魅力を失いつつあったものの、活動家はこのことに気付いていなかった。

しかし、社会主義思想は若者の運動にとって重要な役割を持っていた。この思想は、自

由、平等、民主主義、搾取と抑圧のない社会といった普遍的な価値と密接に結びついていた。社会主義社会を目指すことは、社会を良くしたいと考える者であれば、誰でも共有できる価値を実現しようとすることだった。加えて社会主義思想は、それまでの歴史的な蓄積から個人の問題意識を社会的な意識に変換する大きな可能性を持っていたため、非常に高い価値を持っていた。

さらに、当時の若者にとって社会主義の語彙を用いて議論することは、運動ミリューへの入場券を手に入れることだった。若者は社会主義の語彙を用いることで、1 人きりで不安と問題意識を抱え込んでしまうことを避けることができた。若者は互いに結びついて運動を組織することで、社会に影響力を行使する主体になることができた。社会主義思想は、運動を形成する礎の役割を果たした。

活動家が社会主義思想を信じてしばしば独善的に運動したことは、結果的に西ドイツ社会が多元化するという意味でのリベラル化に貢献した。活動家は、自らの正しさを信じていたからこそ非常に熱心に運動に取り組み、自らの理想を実現するために社会の多様な領域で様々な可能性を試していた。その結果、活動家は政治的能力を増していた一般市民の私生活に近い領域に活動の場を見出し、それまで意識されていなかった新しい政治的要求を取り上げた。さらに活動家のコミュニケーション、つまり仲間内の激しい議論、外部の主体との積極的な交渉、公共空間での活発なアピールは、新しい主体としての若者と一部の市民、および彼ら特有の関心事の存在を周知させた。これによって、新しい主体と問題が重要な社会的要素として承認された。これは、社会のリベラル化と評価できるだろう。